

# 読書のすゝめ

その12 R2 6 / 18

## 第163回 直木賞・芥川賞候補作発表！

毎年大きなニュースになる「芥川賞」と「直木賞」の発表。この二つの賞は文藝春秋の創業者である菊池寛が友人である芥川龍之介と直木三十五の名を付けて昭和10年に制定したものです。

芥川龍之介賞は通常優れた純文学を書いた新人に与えられる文学賞で、直木三十五賞は通常無名・新人または中堅作家による大衆小説に与えられる文学賞です。

● 純文学：「芸術性」「形式」を重んじる小説で、主に文章の美しさと表現方法の多彩さが評価されます。

● 大衆小説：「娯楽性」「商業性」を重んじる小説で、読んで楽しい！と感じるエンターテインメント作品のことです。

● 選考会は7月15日。芥川賞候補作は雑誌掲載のものなので、受賞作が本になったときに図書館で購入します。直木賞候補作については現在2冊があります。他の本は来月中旬には入荷します。



### 芥川賞候補作、

- ▽ 『赤い砂を蹴る』 石原燃
- ▽ 『アウア・エイジ(Our Age)』 岡本学
- ▽ 『首里の馬』 高山羽根子
- ▽ 『破局』 遠野遥
- ▽ 『アキちゃん』 三木三奈

### 直木賞候補作

- ▽ 『雲を紡ぐ』 伊吹有喜
- ▽ 『じんかん』 今村翔吾
- ▽ 『能楽ものがたり 稚児桜』 澤田瞳子
- ▽ 『銀花の蔵』 遠田潤子
- ▽ 『少年と犬』 馳星周



壊れかけた家族は、もう一度、ひとつになれるのか？羊毛を手仕事で染め、紡ぎ、織りあげられた「時を越える布」ホームスパンをめぐる親子三代の心の糸の物語。

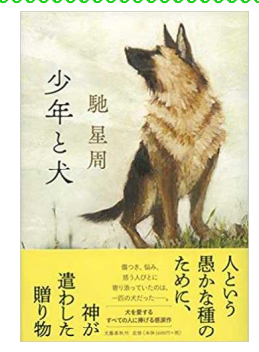
「時代の流れに古びていくのではなく、熟成し、育っていくホームパン。その様子が人の生き方や、家族が織りなす関係に重なり、『雲を紡ぐ』を書きました」と著者は語る。



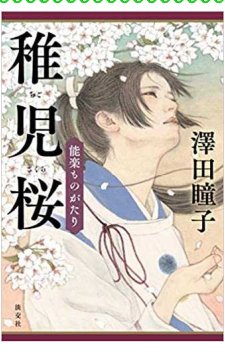
時は天正五年(577)。ある晩、天下統一に邁進する織田信長のもとへ急報が。信長に忠誠を尽くしていたはずの松永久秀が、二度目の謀叛を企てたという。前代未聞の事態を前に、主君の勘気に怯える伝聞役の小姓・狩野又九郎。だが、意外にも信長は、笑みを浮かべた。やがて信長は、かつて久秀と語り明かしたときに直接聞いたという壮絶な半生を語り出す。



大阪万博に沸く日本。絵描きの父と料理上手の母と暮らしていた銀花は、父親の美家に一家で移り住むことになる。そこは、座敷童が出るという言い伝えの残る由緒ある醤油蔵の家だった。家族を襲う数々の苦難と一族の秘められた過去に対峙しながら、少女は大人になっていく。



2011年秋、仙台。震災で職を失った和正は、認知症の母とその母を介護する姉の生活を支えようと、犯罪まがいの仕事をしていた。ある日、和正は、コンビニで、ガリガリに痩せた野良犬を拾う。多聞という名らしいその犬は賢く、和正はすぐに魅了された。その直後、和正はさらにギャラのいい窃盗団の運転手役の仕事に依頼され、金のために引き受けることに。そして多聞を同行させると仕事はうまくいき、多聞は和正の「守り神」になった。だが、多聞はいつもなぜか南の方向に顔を向けていた。多聞は何を求め、どこに行こうとしているのか……



破戒、復讐、嫉妬、欺瞞、贖罪……。能の能の演目を題材にした8編の短編集。表題作「稚児桜」は能「花月」を題材に、親に捨てられ、清水寺の稚児となった花月を父親が探し出すが、同じ稚児で最も頼りない百合若を自分の身代わりとして父に差し出す！。裏切り哀しみ残酷さ、そこはかとなく漂う妖しい空気に満ちた一冊。能の演目を知らずとも十分に楽しめる。